

学術情報

第5回東京女子医大漢方医学研究会

日時 昭和59年11月27日(火)午後17時30分より

会場 東京女子医科大学中央校舎1階会議室

座長 肥田野 信

1. 過去4年間に当科で行なった漢方治療の成績
(精神科)
○田中 朱美・細川 久美・池田 和広
2. 脈診の客観化I. 感冒における脈診上の変化
(産婦人科)○谷 美智士・黄 長華・
井口登美子・吉田 茂子
3. 脈診の客観化II. 正常妊婦及び子宮筋腫における脈状の変化
(産婦人科)○黄 長華・谷 美智士・
井口登美子・吉田 茂子
4. 膠原病患者と瘀血
(皮膚科)
○月本 厚美・尾立 冬樹・肥田野 信
5. 小柴胡湯が有効であった腎移植後肝機能障害の2症例
(腎センター)
○菅 英育・水口 潤・寺岡 慧・
高橋 公太・吉田美喜子・太田 和夫
6. 小柴胡湯と桂枝茯苓丸を併用した肝疾患の検討
(消化器内科)
○中島 弥生・久満 董樹・小幡 裕
7. 気管支喘息及び気管支炎に対する良導絡療法の試み
(第2病院小児科)
○橋本 節子・本城美智恵・
木藤香代子・村田 光範
8. 高血圧症における柴胡加竜骨牡蛎湯の使用経験
(第2病院内科)○菊地 長徳
1. 過去4年間に当科で行った漢方治療の成績
(神経精神科)
田中 朱美・池田 和広・細川 久美
うつ病の診断で治療中の患者のうち、比較的身体症状の目立つ66例(男38例,女28例)に漢方療法を行ない、漢方側からと精神科側からと同時に判定を行なった。漢方側からは、初診時の主症状が大部分消失した場合を著効、半分以上消失した場合又は大部分の症状が明らかに軽減した場合を有効とした。著効18例

(27.3%), 有効22例(33.3%), 合わせると40例(60.6%), 無効, 不変ともに13例(19.7%)ずつであった。精神科側からは身体症状と共に不眠, 抑うつ気分その他の精神症状が改善された場合を改善とし, 26例(39.4%), 不変31例(47%) 不明9例(13.6%)の結果であった。漢方著効18例中精神科的改善例は15例(83.3%)漢方有効22例中精神科的改善例は11例(50%)と漢方薬に反応する症例は向精神薬にもよく反応することを示唆しているものと思われる。また改善例は比較的罹患期間も短かく症状も軽く, 東西医学ともに重症なものは治りにくいという平凡な結果となった。改善例26例に使用した主な方剤は20例(77%)が実証よりの方剤であった。この結果は今後精神疾患にどのような漢方薬を使っていくかの一つの手がかりとなると思われる。

2. 脈診の客観化(I) —感冒における脈診上の変化と試作脈診計—

(産婦人科)黄 長華・谷 美智士・
井口登美子・吉田 茂子

中国医学における脈診を客観的に表現するために半導体ストレンゲージを利用した試作脈診計を作成し, 種々の病症及び状態に使用し, 古典の脈診と比較検討した。

まず浮, 沈の証を加温及び寒冷刺激によって作り, 古典的脈診において浮, 沈の脈証を確認した後, 脈診計における脈波形の変化を観察した。その結果, 浮脈は波形上で微分脈波の垂切痕が深く大きな波形に変化し, 沈脈では逆に浅い小さな垂切痕へと変化した。また飲酒による浮脈化と感冒初期の浮脈とは波形上同様の変化を示し, 試作脈診計が中国医学でいう脈状の変化を十分捉えうる可能性が確認された。又, 脈診上の基本的変化の一つである虚脈と実脈については, 測定感圧素子の圧迫圧の変化に対する脈波振幅の大小及び出現の消去圧を測定することにより鑑別可能であることが解った。以上から本脈診計は脈診の基本である六粗脈の弁別については十分使用可能であり, 臨床使用に耐え得るものであると思われる。

3. 脈診の客観化(II) —正常妊婦及び子宮筋腫における脈状の変化—

(産婦人科)黄 長華・谷 美智士・
井口登美子・吉田 茂子

中国医学の重要な診断法の1つである脈診を客観化するため、証変化の激しい子宮筋腫患者の手術前後及び正常妊産婦の分娩前後の脈状変化を脈診計使用により測定を試みた。

結果、1) 子宮筋腫患者では、脈診手術前に渋、緊脈であったものが術後には滑、浮脈化を、波形では亜切痕の出現、増大などの脈軟化を認めた。波脈は瘀血の代表的脈状で、筋腫摘出により瘀血が改善され、滑脈に変化した。

2) 正常妊産婦では、脈拍数は産後は産前に比し遅脈化、波高は分娩前は分娩後に対し大きく著しい深い亜切痕を認めた。波幅では分娩前は分娩後に比べ狭い、このことは分娩前は正常に対して浮脈、かつ滑脈化を意味する。波形変化は分娩前は深い亜切痕をもつ浮脈のパターンが分娩後正常脈形にもどった。脈診法では分娩前の浮脈が分娩後著しく減少し、平脈、滑脈、緊脈に変化した。

今回我々は子宮筋腫手術前後、正常妊産婦の分娩前後の脈状を検査し、その結果古典に記載された脈状の変化を客観的に捉えた。

4. 膠原病患者と瘀血

(皮膚科)

月本 厚美・尾立 冬樹・肥田野 信

寺沢らの提唱したスコア方式による瘀血の診断基準を用い、膠原病の瘀血病態について検討した。調査した膠原病患者は、RA 女1人、LE 男1人、女13人、PSS 女4人、DM 男1人、女1人、その他女3人の計24人でこれらと18人のコントロール群と比較した。膠原病患者の平均年齢は46.6歳で、非瘀血病態15人(62.5%)、瘀血病態6人(25%)、重症の瘀血病態3人(12.5%)でこれに対しコントロール群の平均年齢は44.0歳で、非瘀血病態10人(55.6%)、瘀血病態6人(33.3%)、重症の瘀血病態2人(11.1%)で膠原病患者とコントロール群との間に有意差は認めなかった。瘀血病態を示した4人に桂枝茯苓丸の内服を始めたが、1人で著効。1人ふらつきのため内服中止。2人は経過観察中である。

5. 小柴胡湯が有効であった腎移植後肝機能障害の2症例

(腎センター)

菅 英育・水口 潤・寺岡 慧・
高橋 公太・吉田美喜子・太田 和夫

急性および慢性肝炎などによる肝機能障害に対して従来、安静と食事療法のほかに各種の肝庇護剤の投与

が試みられているが、いまだ確実な治療法はえられていない。漢方では同疾患に対して小柴胡湯の有効性が知られており、多くの使用経験が報告されている。

当科において、肝機能障害は腎移植後患者の社会復帰を妨げる重大な合併症のひとつであり、治療困難な症例も少なくない。今回われわれは腎移植後に肝機能障害を合併した患者のうち従来の治療法では、症状ならびに肝機能の改善を認めなかった2症例に対し、小柴胡湯を投与したところ自覚症状が消失し、肝機能の改善を認め、良好な臨床経過を示したのでこれを報告する。

6. 小柴胡湯と桂枝茯苓丸を併用した肝疾患の検討 (消化器内科)

中島 弥生・久満 董樹・小幡 裕

慢性肝障害の診断を受け、当科外来通院加療中の患者58例にツムラ小柴胡湯、桂枝茯苓丸を投与し、transaminaseの推移を検討した。

transaminaseの改善率は6カ月・12カ月で30%前後であり、悪化率は6カ月・12カ月で15%前後であった。HBs Ag陽性群6例、及び陰性群52例に分けて検討すると陽性群により効果を認める傾向を示した。さらに肝生検にて確認したCAH 21例、CIH 6例に分けて検討したところCIHに若干効果の高い傾向を示した。

自覚症状の改善率は28%、悪化したものはなかった。しかし、他覚症状の改善例も認めなかった。副作用と思われる症状で服薬を中止したものはなかった。

7. 気管支喘息及び気管支炎に対する良導絡療法の試み

(第2病院小児科)

橋本 節子・本城美智恵・
木藤香代子・村田 光範

近年、漢方エキス製剤の使用が可能となり日常診療で東洋医学が新たな脚光をあびるようになった。又、針灸療法においても、西洋医学では治療困難な疾病及び症状に有効な治療成績を示し注目されてきた。しかし、中国数千年の歴史を有し、臨床大系が確立しているこれら針灸療法を修得する事は、西洋医学を学んだ我々医師にとっては、かなり困難である。最近は、針麻酔の導入により、電経療法が広く行なわれるようになり、技術上の簡便化が見られ、又時に従来の針治療を上まわる効果が見られる。電経療法は、一般にツボと呼ばれる経穴に通電する療法で、良導絡療法、高及び低周波療法等がある。今回私共は、当院アレルギー外来に通院加療中の気管支喘息患児2名(4歳の女兒、